

第四章 空と大地の間で

早朝、船はデニアから出港した。船乗りたちの仕事の邪魔にならぬよう、トゥラスらは荷物の間でじつとしていた。

数日も船に揺られ、毎日まだかまだかとチュンオウに訪ねていたら、お前は子供かとりに言われ、それから聞かないことにした。

チュンオウは相変わらず文献を調べるリビと何かを話している。退屈なのでヒヨウビと昼寝をしていると、いつの間にか港に着いていた。

違っていた。港に市場はない。海沿いには、海岸と陸とを完全に隔ててしまうような壁がそそり立っていたのだ。壁は巨大な石が積み上がってできており、来るものを拒んでいるようだった。

そそり立つ壁の間には、いくつか塔があった。交易を担っている建物らしく、役人らしき者たちが出入りしていた。

民の姿はなく、歩いているのは塔の物騒な役人たちだった。毛皮の着物に薄っぺらな金属の胸当てをしているだけだったが、見るからに屈強な身体はそれだけでも鎧だった。

チュンオウは采覇の商人、リビは旅の途中で雇った医者、トゥラスも旅の途中で雇った護衛と、それらしいごまかしで関所をくぐることになった。なぜそんな嘘をつくのかと聞くとリビが教えてくれた。

ヒエミチリアスの様子は、デニアとは大分

してとても厳しいという噂があるからだということだった。

噂通り、役人は疑い深い目でじろじろと観察した後、ヒョウビについて聞いてきた。すると、それが商品だとチウンオウは言つてのけた。あまり気持ちの良い嘘ではなかつたが、仕方なかつた。

しかしそんな複雑な気持ちも、開いた関所

なかつた。

「海だ……」

思わず口からこぼれた。

「どこが海なんだ？」

リビが訝しげに聞いてきた。

「上も下も、全部だ」

の大地から離せないでいた。

海のような、視界に收まらぬ広い大地。草が大地から離れるのを惜しむように、短い背丈でどこまでも続く。我が先にと天に向かう

森の木々と違う謙虚な草原だ。誰もが風にない日光を受けられるようになると、長さはほぼ均一で、大きく吹かれれば大地にさきやかな波を作る。

遠くまで続くのは草原だけではない。空もまた、視界に入りきらないくらい広い。こんなに大きな空は、船の上からしか見たことがなかつた。

なかつた。

「海だ……」

思わず口からこぼれた。

「どこが海なんだ？」

リビが訝しげに聞いてきた。

「上も下も、全部だ」

天も地も、広大。きっと両手を広げて自分

の存在を誇示しようとも、この天と地は気づきもないだろう。少し黄色の混じった緑のさざなみには、空に薄い雲があるのに影は落

ちていな。かなり遠くの雲が見えているのだ。海の潮風ではない、草と土の香りがする。これも一つの命のかたちだった。

リヨウキの眼がはるか先を捉えている。彼

は今にもこの草の大地で疾風になりたいと爛々と蹄を鳴らしたが、背の荷物がその心に少しばかりの影を落としていた。

第四章 空と大地の間で

申し訳ないと、チュンオウが彼のつやかな首を撫でた。こんなに荷物を増やしてしまつて悪かったと、トゥラスモリヨウキに謝つた。

白くて温かそうな毛をまとった羊。白い丸いものは、それらを飼う人々の家だつた。
「この辺りは遊牧の民の土地であるのか」

チュンオウがつぶやいた。

広大な土地はどこまで歩いても広大だった。広過ぎて、いくら歩いても進んだ感覚が全くない。ただ、振りかえるとそこには地平線をなぞるように港の壁があつて、その壁の大きさを見ればどのくらいの距離を歩いた

天は美しい夕日で染められていた。広く伸びた雲が橙の光できらめき、空の端はもう夜を受け入れ始めている。

チュンオウは宿を求め、一番近くにある平たい円柱の白い家を目指した。

海岸の壁もただの線のようにしか見えないところまで来ると、草原の海に白くて丸い大きなものと、黒と白の点がいくつも見え始めた。

いることがわかった。不思議な家もあるものだとトゥラスがまじまじと見ていると、家の裏から牛を引いた男が現れた。

「旅人か、珍しい。そろそろ日が暮れるが、宿と食事のあてはあるのかい？」

唐突に聞かれ、チュンオウも驚いたようだ。「いや、ここには今日着いたばかりで、なんのあてもない。もしや、ここは宿屋であるのですか？」

髭を蓄えた男は大笑いした。

「こんな辺鄙などころに宿屋などあるわけがない。旅人は出会った者がもてなすのが常識だ。あてがないのなら、ここで食べて寝ていけばいい」

男が来いと手招きするので、トゥラスはリビングと顔を見合させて、男に案内されるチュンオウの後を追つた。

男が牛を放したあたりにリョウキを繋いで、ヒヨウビもそこに寝そべった。二頭は草原がとても気に入つたようで、リョウキは遠くを見つめ、ヒヨウビは草の地面に体をこすりつけていた。

その二頭を置いて布の家に入ると、中は広々とした空間が広がっていた。端の方に小さなベッドが作られており、草原の床には美しい織物が敷かれている。

空間の中心は台所のようで、大きな鍋がぐつぐつと美味しそうな音をたてていた。香りの良い湯気は真っすぐに立ち上り、屋根の真ん中に空いた穴から夕空に吸い込まれていった。

「あら、珍しい旅の方々。どこからいらしたのかしら」

鍋の番をしている帽子を被つた女が、驚い

た様子で顔をあげた。

「ここには今日着いたばかりで、ついこの間
はデニアになりました」

チュンオウがそう言つてゐる間に、男は三
人の娘たちに敷物を持つてこいと言いつけ
ていた。

まだ若く初々しい面立ちの娘たちは、珍し
い旅人に騒ぎながら、鮮やかな色の敷物をき
つちり三枚敷いてくれた。

トゥラスはフードから目を覗かせ、自分の
敷物を敷いてくれた娘に「ありがとう」と言
つた。すると、娘は顔を真っ赤にして、すぐ
に顔を背けてしまった。何か悪いことでもし
てしまつたのかと心配したが、思い当たること
はないので、適当に思考は断つことにした。
男や彼の妻、娘たちの顔立ちは、なんとな
くリビや自分の系統に近かつた。チュンオウ

とは違ひ、彫が深く眼や肌の色が少し薄い。
もしかしたら自分の親がこの辺りにいるの
ではないかというリビの予想は、的中してし
まうのではないかと少し不安だつた。

産みの親とばったり会つてしまおうもの
なら、これまで築いてきた養母や兄弟たちと
の生活が消されてしまう気がしたのだ。

しかし世界は広い。それは今しみじみと感
じていることだ。だからそんな偶然はそうそ
う無いだろう。トゥラスはそう割り切ること
にした。そしてチュンオウとリビに続いて、
敷物に座つた。

「旅は喉が渴くだろう。お前たち、ミルク茶
を入れてあげなさい」

娘たちはすぐに小さな椀に何かを注ぐと、
こちらに運んできてくれた。

先ほど顔を赤くしてゐた娘が、トゥラスの

分を持ってきた。ということは、怒らせたり困らせたりしたわけではないのだと、トゥラスはほっとして椀を受取った。

「ありがとう。これは旨いのか？」

それはクルミ色の液体だった。湯気の香りをかぐと、ミルクなのか茶なのかよくわからぬ。海水や酒のこともあるので、トゥラスはすぐに飲むのを躊躇した。

「美味しいですよ。今朝とれたミルクで煮たお茶ですから」

娘は八重歯を覗かせ、にっこりと笑った。恐る恐る一口飲むと、全身がじわりとあたたかくなつた。次いでぽかぽかしてくる。少し苦味の利いたお茶を、ミルクが柔らかい舌触りにしていた。

「本当だ。旨いな」

そう言うと、トゥラスは一気に飲み干して

空の椀を娘に返した。

「まあ早い」

鍋を温めている女が笑つた。

「ねえ、旅の方」

空の椀を両手に包んだ娘が、恥ずかしそうに言つてきた。

「もう家の中なのに、フードは外さないのですか？」

なかなか困つた質問だ。

「悪いな。俺は光が苦手でね。鍋の火もあるし、まだ空の半分に太陽が出てる。こんなに明るいと目が痛いんだ」

「なんだ、そういうことは早く言つてくれ」男は慌てて「火を弱めなさい」と妻に言い、女も慌てて火を小さくした。

「どうだい、これで大丈夫かい？」

男に問われ、トゥラスは「ましになつた。

「ありがたい」と、感謝の言葉を添えた。

「それじゃあ、フードを取つて下さい。綺麗に畳みますから」

ぱっと顔を明るくして、娘が言う。鍋の手伝いをしていた娘が「そんなに旅の方のお顔が見たいのね」とひやかした。

トゥラスは何のことかわからなかつたが、そばの娘が「だつてとても綺麗な目が見えたんですもの」と顔を真っ赤にして必死に言つてゐるので、次第に申し訳なくなつてきた。それを見て男は大いに笑い、上機嫌に言つた。

「フードの兄さんよ、フードを取つてやつてくれんかね。二番目の娘は気難しくて婿探しに手を焼くかと思つていたんだが、こんな娘を見るのは初めてだ。どんな顔に惚れたのかわしにも見せてくれないか」

ここまで言われては、嫌だの一点張りはできそうになかった。ミルク茶ももらつたところだし、今晚はここに寝かせてもらうのだ。そもそももてなしてもらつていてるのに、顔を見せないのは悪い気がした。

旅を始めてからは日中に動くことが多くなつたので、多少の光は我慢できるようになつてきた。だから少しあはいいかと、トゥラスはフードを取ることにした。

「できるだけ光を浴びたくないんだ。だから顔を見せるだけで勘弁してくれ」

そう言つて、トゥラスはフードを脱いだ。刹那、横で爛々と目を輝かせていた娘が、大きな悲鳴をあげた。鍋の方にいた二人の娘も女も、腰を抜かして悲鳴をあげていた。

何が起こつたのかわからず、トゥラスは首をかしげた。チュンオウもリビも顔を見合わ

せた。

すると、男が立ち上がり、腰の剣を抜いてトゥラスに突きつけた。

「おまえ、隠していたのはそれだつたのか！」

ますます何がなにやらわからない。

「何か悪いことでもしたか……？」

おずおずと聞いてみたが、男は威嚇するよう剣を振り上げた。

「忌まわしい白い悪魔め！　さっさとここから出ていけ！」

そうだった。すっかり忘れていた。この姿のために自分は森に閉じ込められたのだ。

たかが髪の色でここまで言われることに腹が立つたが、同時に心がざつくりと引き裂かれた音が聞こえた。そこから冷たいものが染み込み、反論する言葉さえ見つけられなかつた。

「トゥラス」

リビの声で我に返った。

荷物を抱えたチュンオウが、優しく背を押した。

「行くぞ、トゥラス」

チュンオウに押されるまま、急いで外に出た。「さっさと出ていけ！」と罵声を飛ばし、男は炎をつけた松明を振りかざした。

火の粉はトゥラスに向けてまき散らされた。突然目の前を通り過ぎた強い光のせいで、

トゥラスの両目には激痛が走った。

「トゥラス、こっちだ」

リビが肩を押して、暗くなつた外へ導いてくれた。

「二度と来るな、この悪魔め！」

男はそう言い放つと、板で入口をふさいでしまつた。それからは静けさが戻つた。いつ

の間にか太陽が沈んでいた外は、驚くほど冷たい風が這いまわっていた。ぞくりと、背筋が震えた。

「俺のせいで、ごめん」

「トゥラスよ、何も気にするでない」

まだ目がおかしくてよく見えなかつたが、

わかつた。

「そなたは何も悪くない」

心が壊れてしまいそうだつた。一方的に罵倒されたのに、なぜ怒りではなく慘めさや悲しさが膨らむのだろう。なぜ怖ろしくてたまらないのだろう。

食事を与えられなかつたり、どこかの沼に沈められたり、殴られたり刺されたりして何も抵抗はできなかつた。そんな自分の代わりに抵抗を続けてきたのは、森に逃がしてくれた養母だ。

「こんなものから俺を守ってくれていたのか……」

白い姿で生まれた自分は、悪魔の子とされ疎まれた。記憶のない赤子の頃、自分に向かれたこの暴力は、一体誰が受け止めた？

誰がこの怖ろしい暴力の中から自分を救つ

てくれたというのか。

森に追いやられるほどの言葉や暴力を、養母は自分の代わりに受け続けたに違いない。養母が受け止めなければ、自分はとっくに死んでいただろう。

痛みの残る目が熱くなつた。耳の形見に触れて、養母に心から感謝した。もう直接伝えられないことが悔やまる。

「トゥラスよ、そなたはなんと強いのだ」

うつすらと目を開くと、ぼやけた視界にチュンオウの顔が見えた。

「人を恨んでもおかしくはないこの時に、そなたを育てた養母を思い出し、感謝することができるとは……。簡単にできるものではない。そのようなそなたが、悪魔であるはずはないのだよ」

チュンオウが皺の刻まれた手でトゥラスの手を握った。肩にはずっとリビが手添えてくれている。

足元の温もりはヒヨウビだ。心の奥に注がれる温かい心は、リヨウキの優しい励ました。

「はは！」

トゥラスはふつきるよう笑った。目をこすつて見上げれば、空には満天の星空が見えた。

「俺らしくない！ 俺のことなんてこれつ

ぽつちも知らないやつが、どうして俺が悪魔だなんて言えるんだ？ 俺のことを知つている爺さんやリビは、俺を一言もそんな風に言つたことはない。ヒヨウビやリヨウキだってそだ。俺はそれを信じればいいんだ！」

トゥラスは草原を思い切り走つて、そして草原に飛び込むように寝転がつた。仰向けてなつて、空気をいっぱい吸つて、無垢に輝く星空を眺めた。傍に寄り添うようにリヨウキが横たわつた。

星空が明日は晴れだと教えてくれている。夜の冷たい風にそよぐ草は、朝になればすぐ温かい風が吹くと教えてくれている。

世界の大半を埋めつくしている自然たちは、いつだつて味方だ。

「トゥラス」

リビが傍らに立つて、こちらを見下ろした。

「人の持つれる言葉は、時にどんな刃 より
鋭くなる」^{やいば}

トゥラスも、船でリビと話したことを思い

出していた。

「……悪かったな。俺のせいで今日は野宿だ。

牛も羊も、草原の夜は寒いと言つてる」

トゥラスは身を起こして、ヒョウビを抱き
寄せた。

第四章 空と大地の間で

朝は寒かったが、太陽が昇るにつれて温か
くなってきた。トゥラスはフードを目深にか
ぶり、草原を歩いた。

「ヒョウビが、自分のそばで寝ろと言つてい
る。ヒョウビは温かいから、そうさせてもら
おう」

チュンオウに引かれてリヨウキもやつて
きた。リヨウキもトゥラスのそばで横になつ
た。

逃れるようにフードを被つている自分が
情けなかった。光が苦手だということを理由
にして、こそぞ隠れているのを正当化しよ
うとしているように思えてならないのだ。も
し白い髪のままで光が苦手でなかつたら、今
この国でフードを外せるだらうか。

トゥラスはいつの間にか笑つて いる自分
に気がついた。そしていつしか、心もふわり
と温かくなっていた。

「リヨウキは風避けになってくれるらしい。
ありがとう、リヨウキ。ヒョウビもありがと

が、空が明るくなると心細くなつていた。

この広い海のような大地で生活している遊牧の民は、きっと誰もが自分の姿を怖れ、軽蔑するだろう。旅を共にする二人と二頭は人だけだと思うと、とても怖ろしかった。気が滅入って、光に抗ってやろうと空を仰いだが、目が痛くてたまらなくて、結局はフードに助けられた。

「どうした？」

歩みを止めたトゥラスに、リビが振り返った。

トゥラスは再び歩み始めた。

高い木があまりない草原は、昼間は太陽が照りつけて暑い。しかし湿気がない乾いた風が吹くと、とても涼しくなった。ただ、やけに今日の風はきつかった。突風が吹く度に、

トゥラスはフードが飛ばされないように注意しなければならなかつた。

夕方になるとどんどん冷えてきて、夜はまた冷えてくるぞと身構えた。この草原の国を過ぎるまで、風雨をしのぐ宿をとるのは難しいから、きっと過酷なたびになるのだろうなとトゥラスは察した。そして、そんな過酷な旅を強いてしまう原因となつた自分を呪つた。

遠くには、湯気の昇る白い布の家がある。羊飼いの男が、牛を引きながら声を響かせていた。草原の海に伸び伸びと響くその声は、犬を操る号令のようだつた。茶色い犬が、羊たちを面白いほど上手に帰路に導いている。きっとあの男に宿を頼めば泊めてくれるのだろうが、チュンオウもリビも、男に気付いても歩みは止めなかつた。

申し訳ないなと思いつつトゥラスもチュンオウらに続いて歩いていると、耳に届く男の声が、先ほどと様子が違うことに気がついた。

「おーい、おーい」

犬の号令は、呼びかける声に変わっていた。

「爺さん」

トゥラスは立ち止った。チュンオウもリビも足を止めたが、リビが言つた。

「宿は無用だと伝えて参りましょう」

そうして男の方へ向かおうとしたリビを、

トゥラスは制した。

「いや、宿を頼もう。夜は冷える。爺さんは宿の方がいい。お前は爺さんに付き添え。俺はヒヨウビと野宿でいい」

「トゥラス……」

そんなことを言つてゐる間に、男はすぐ目

の前まできていた。驚いたことに、牛に跨つていたのだ。土埃を上げて突進する牛を、男は上手く操つてチュンオウの前に止めた。

「やあ、こんばんは。旅の方ですか？」

爽やかな声で、男はチュンオウ、リビ、トゥラスを順に見て訊ねてきた。

青年とも呼べるまだ若い男は、黒い髪を後ろに束ねており、トゥラスと同系の顔立ちをしていた。彫が深く、眼鼻立ちがはつきりしていり。その顔で、男は何の警戒も疑念もなくにこりと笑いかけてきた。

「旅の調子はどうですか？ よければ旅の話を聞かせてくれませんか。この辺じゃ外の者は珍しい。話のお礼と言つてはなんですが、今晩は家に泊つて下さい」

やはりこの国の者は穏和で友好的だ。相手が白い髪の者でなければの話だが。

トゥラスは「早朝に落ちあおう」と言つて、男に背を向けた。そのトゥラスに、何も知らない男は朗らかに呼びかけてきた。

「君も泊つていくといい。狭いが敷物は三人分用意できるから」

そして男はヒョウビを一瞥し、付け加えた。「彼も是非連れて来てくれ。きっと子供たちが喜ぶ」

男がヒョウビを『彼』と呼んでくれたことにとても好感が持てたので、トゥラスは努めて明るく断つた。

「爺さん達を泊めてやつてくれ。でも俺はい

い。俺は外が好きでね。この草原は星が綺麗に見えるから、空を見て寝たいのさ」

男が「確かに空は綺麗だ」と笑つたが、しかしすぐに顔を曇らせた。

「だが夜は冷える。今日は風も強い。体を壊

してしまっては旅の歩みも止まってしまうし、何より君が危険だ」

チュンオウがじつとこちらを見ているのを知りながら、トゥラスはもう一度断ろうと、断る理由をいくつか考えた。そしてそれを口に出そうとした時、一段と強い突風が草原を滑り、トゥラスのフードを巻き上げた。

手を伸ばしてフードの端をつかめたが、白い髪は露わになってしまった。まずいと思つて慌ててフードを被つたが、男は目を大きく開けてこちらを凝視していた。

「まさか！」

男が叫ぶと同時に、トゥラスは走りだしていた。情けないと思ったが、そうしないとチュンオウもリビも宿をなくしてしまう。そうならないように、今は一目散に逃げてしまわねばならなかつた。

悔しさを噛み殺しながら、トゥラスはリビやチュンオウの呼びかけにも振り返らずに走った。

「待ってくれ！」

牛の上の男が叫んだ。

「俺は作り話なんて信じやしない！　君も泊るといい！」

思いがけない言葉に、足が止まった。振り返ると、男が頭を垂れた。

「遊牧の仲間が酷いことをしたようだ……。私に免じてどうか許してやってくれないか」

逃げる理由も断る理由もなくなった。

男は太陽のように微笑んだ。本物の太陽は

苦手だったが、この男の無垢な笑顔は別だつた。冷たい刃で引き裂かれた心に、木漏れ日のような温かさが滲んだ。

第四章 空と大地の間で

トゥラスらは、やはり白い布の家の方へ案内された。屋根からは湯気が立ち上り、美味しそうな匂いが漂っている。

「旅路は腹が減るでしょう。丁度夕食の時間ですから、たんと食べていいって下さい」

羊たちが囲われている広い柵の中に牛を入れながら、男が言った。「その毛並みの良い彼も、こちらへどうぞ」と、チュンオウに促した。チュンオウはリヨウキを柵の中へ入られながら男に訊ねた。

「夕食と一緒にいただいて、よろしいのですか？」

「もちろんです」

男は手織りの垂れ幕をくぐって、家の中に何か言うと、垂れ幕を上げたまま「どうぞ」とチュンオウとリビをくぐらせた。

トウラスは、ヒヨウビにリヨウキと共に待つているよう言つてから、リビの後に続いて布の家に入った。

中は先日の家と似たようなものだつた。ただ、織物の色合いや模様が違うので、雰囲気はずいぶんと違つた。前の家は赤と黒が目立つた織物だつたが、ここは赤と黄色が鮮やかだつた。

隅にベッドが据えてあり、真ん中に鍋が煮えていて、天上のぽつかり空いた穴に湯気が昇つているのは同じだつた。

鍋を見ているのは男の妻だろうか。彼の娘と思われる幼い少女が、家族分に加えて小さな敷物を三つ敷いてくれた。

男が敷物に胡坐をかくと、寄ってきた幼い男児二人が男の膝へちょこんと腰を下ろした。

「そら、挨拶をしなさい。お客様さんだよ」子供らは物珍しそうにこちらを見ながら、「こんばんは」と言つた。

チュンオウが「こんばんは。大きな声の元気な子だ」と笑うと、子供らも恥ずかしそうに笑つた。

一番豪華な敷物には老人が座つていた。男は老人を「妻の祖父です」と紹介してくれた。「そこに座つて下さい」

男が言うので、チュンオウは「かたじけない」と座つた。トウラスに続いてリビも腰を下ろした。

「国外の旅人と夕食を囲めるだなんて、運がいい。ぜひ旅の面白い話を聞かせて下さい」

座るや否や、男が聞いてきた。名前も旅の経緯も聞かない。こういう人間もいるのかと、トウラスは嬉しくなつた。無暗に探りを入れ

たり名を求めたりしないのは、とても好感が持てた。彼の気さくな心は、まるでこの草原のようだとトゥラスは思った。森にいた頃を思い出す。

トゥラスは、白い髪を受け入れてくれる遊牧の民に出会って、すっかり心も軽くなつていた。

「ここは気持ちの良い場所だな」

トゥラスはチュンオウヤリビの代わりに言つた。彼らは無償のもてなしに慣れていないようで、一番くつろいでいるトゥラスが男の会話に乗つた。

「この外の世界じや、もてなしを受けたり何かするたびに名前が必要らしい。しかも自分が先に名乗らなきやならないけねえって規則まであるらしい」

「それは面倒だな！」

遊牧民の男は笑つた。彼の妻から、トゥラスは湯気の立つくるみ色の飲み物を受取った。多分ミルク茶だ。

「ここは俺のいたところに似てるよ。人間だけじゃないところがいい」

「そりやよかつた。気兼ねなく飲んで食つて寝てくといい」

そこへ夕食が運ばれてきた。大きな椀に、豪快にゆで上がつた肉が盛りつけられていく。一人一つずつ配られ、トゥラスは受取ると、首回りのフードを少し下げてすぐに汁を飲んだ。

「こりや何の肉だ？」

「羊だよ」

「へえ。食つたことないな。俺は兎とか鳥ばかりだったから。運が良ければ狼だつたな」

「君は狼も狩るのかい！」

男がたまげて聞いてきたので、トゥラスは少し自慢げに言つた。

「あっちから喧嘩を仕掛けてきた時はな。槍で何度も仕留めたぜ」

「槍か。俺たちは弓だな」

そのように男が言つてきたので、トゥラスも驚いた。

「ここにも狼が出るのか！」

「ああ。家畜を狙つてな。困つたもんだよ」

男はそれでも笑つて、羊肉を頬張つた。同

じようにトゥラスも肉にかぶりついた。焼いたものと違つて、ゆでると煮汁を吸い込んで汁の香が広がる。もちろん肉の味もよく、柔らかい。まだ若い羊なのだなどトゥラスは推測した。

チュンオウとリビは、湯気を吹きながら食べていた。チュンオウは「こんな旨い肉は初

めて食べました」と言つた。男も男の妻も、嬉しそうに笑つた。

「狼つてのは、ここいらでも嫌われているのか？」

トゥラスが訪ねると、男は肩をすくめた。

「そりやあな。手塩にかけて育てた家畜を食われたら、俺たちの食う物がなくなつちまう」

「じゃあ、襲われた時には、守るために戦うのか？」

「そうだな」

その答えにトゥラスはほつとした。自然に沿う目的の下に戦うのであれば、この土地はまだ闇というものにのまれていないので違うと思った。だが、戦うということ、それ自分がトゥラスにとつてわけのわからないことになつてゐるのは確かだつた。

戦うとは、何か。戦うということは傷つけ

る相手がいるということ。その相手が何であれば良いのか、何であれば悪いのか。その境界がさっぱりわからないのだが、生きるために狼と戦ってきた自分は、この男が狼を狩らねばならない理由もよくわかった。生きるために必要なことなのだ。多分、食べ物の循環の一 部だ。

「だが狼は気高い生き物だ」

男が言つた。

「やつらは自由だ。俺たち人間に媚びることなく、養われることなく、この大地をたつた 独りでも生き抜く精神と力を持つてゐる。それは称えるに等しい。俺たちは狼を狩つたら、絶対に頭は食べない。埋めてやるんだ。花が

咲いていたら、それも一緒に埋める」

感心した。森にいたときには喧嘩を売つてくると敵対していたが、確かに媚びる生き方

をするやつらではなかつた。むしろ何にも心を許さぬ、強固な意思を持つてゐるようを感じた。獣の意思を理解できるトゥラスも、狼の心はなかなか汲み取れなかつたのだ。

「確かに狼は媚びない眼をしてゐるな。あいつら、俺がいくら話しかけたつて聞き耳立てやしなかつた。なるほどな、それを気高いとも言うのか」

「ああ。俺たちはそう考える」

男はそう言つたが、彼の妻は「でもやっぱ り、狼は困ります」と言つるので、トゥラスは それもそうだと笑つた。

「お伺いしますが、ヒエミチリアスは遊牧の ホピネス族の国なのですか？」

ようやくりビが会話に入つた。

「そうだ。ここ一帯はホピネス族が共有して

「そうでしたか。遊牧が失われたとの噂も聞いたので、すっかりホピネスの民も農耕の文化となつたのかと思つていました」

だがそこへ、静かに羊肉を食べていた老人が口を開いた。

「実際のところは、そうなりつつある」

羊肉の味の染みた汁をすすつて、それからこう続けた。

「ホピネスは自由の民だつた。この悠久の大 地を、草を求めて移動する。どこが誰の土地でもなく、皆の土地。雨が降らねば降る場所を目指し、寒くなれば温かいところへ。この辺りはまだそういう暮らしをしているが、城 の近くはそうではない」

闇のことだろうか。チュンオウが、ヒエミ

チリアスが戦を広げていると言つていたことと、何か関係があるのだろうか。

「それは何ゆえか、理由はご存じなのでですか？」

やはり、チュンオウが訪ねた。老人は頷きもせず、続けた。

「我ら遊牧の自由を手にするということは、立ち向かうべきものも増えるということ。自然は時に穏やかであり、時に荒々しくもある。その変化に挑める、勇気あり力ある者でなければ、自由な生き方は得られない。それを覚悟で、自由であり自然と共にいるのが我らホピネスの美德であった。だが、自由を捨てても安住を得たいとする者が現れ始めた」

その老人の息子であろう男も、静かに頷いて羊肉の椀を置いた。家の皆が、老人の話に耳を傾けた。

「わしがまだ生まれるいくらか前の昔、ここを酷い干ばつが襲つた。雨は降らずに草は枯

れ、冬の雪も少なくて、家畜らは氷の湖から水分を得られずに死んだ。それからだ、農耕に生活を変えた者が現れたのは

老人は大きく吐息をつくと、続けた。

「彼らは気候の穏やかな土地に自分の土地を決め、そこに定住し、食糧を安定して得られる環境を築いた。それはいい。そういう生き方があってもいい。だが、その生き方は権力者を生み出した。遊牧の民は自由の民。束縛する権力者などいなかつたし、土地も誰の物と決める必要はなかつた。生きるには天候を読み、いつどこに移動するかを決める自分の判断を信じるのみで、他人の指導などいらなかつた。物欲も無かつたし、豪華なものを求める心もなかつた。移動するのに物が多いのは不便じやからな」

かる。布で家を造るのは、すぐに解体して、またどこにでも建て直せるようとの工夫だろう。布ならば、畳んだり巻いたりすれば持ち運ぶのも便利だ。

床も造つたところで移動するのに不便なだけだから、きっとこうして敷物を敷いただけにしてあるのだ。

家具や物も、少ない方が好きな時に手軽に移動ができる。

「だが定住というのは、移動の必要がないからか、物をため込む性質を作つた。その環境は物欲をかきたて、より多くの物を、より豪華な物をと求める心をつくつたのだ。それは権力者を作り出すもととなつた。豪華な物をたくさん身につけ、所有し、広大な土地を持つものがだんだん辺りを支配するようにな

この家を見ると、この老人の考えがよくわ

つた。それからだよ、ここがヒエミチリアスと呼ばれるようになつたのは」

ある権力者がこの土地を自分の土地だと宣言し、国ができた。彼は土地を民に分け与える代わりに、権力の座を得た。その家系が、今のヒエミチリアスの王族だと言う。

「人間らしい話だ」

リビが、小さく呟いた。

この老人の悲しむところは、トゥラスには良くわかつた。狩りで食糧を得なければならなかつた森の生活は、時に死をも連想させるほどの自然の怖ろしさを、数え切れぬほどこの身に叩きこんだ。しかしその生活は嫌いではなかつた。

旅をして人間の生活を見るようになつてから、森はなんと束縛のない世界だつたのだろうかと回想できる。時に命も脅かすような

荒れ狂う一面を持つ自然に立ち向かいながらも、共に生きるその暮らしを自由と表現する彼らに、トゥラスは共感できた。

「わしは王族を強欲の一族と思つておる。周りに戦ばかり広げ、そんなに土地が欲しいのか。土地は神が生きるものへ平等に与えてくれた恵みだというのに……」

「あなたも、ヒエミチリアスの王族の振る舞いを御存じなのですね」

チュンオウが、嘆く老人に聞いた。老人の代わりに、男が言う。

「遊牧の民は自由の民と言うが、ヒエミチリアスでは武人の民とも言われている。俺たちは牛が移動手段で、牛がないと生活が成り立たない。そういう生活だから、より強く猛々しい牛が俺たちの宝で、それを操れる男が一人前と認められるから、みんなこぞつて